

「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現 大学生と高校生を対象に

権 英 秀

Abstract

This paper discusses “Refusal” expressions by Japanese university students and high school students.

The results of my Discourse Role tests show:

1. When university students refuse the request by their elder brothers and sisters, they work on the requester's selfish-face by using “statement of alternative”.
2. When high school students refuse the request, they work on the selfish-face of their elder brothers and sisters by using “insult”.
3. To close seniors, university students and high school students work on the mutual face by using “apology”.
4. To close seniors, university students work on speaker's negative face, too. But high school students do not do so.

キーワード……談話ロール(Discourse Role test) ポライトネス(politeness)

意味公式(Semantic formulas) フェイス(face)

1. はじめに

「断り」発話行為¹⁾は、他の発話行為より相手との人間関係が強く絡んでおり、断る側は相手との諸関係である「親疎関係」、「年齢層の差」、「発話内容」などをより慎重に考慮し断らなければならない。「断り」の先行研究では、相手との諸関係の要素が「断り」表現にどのような影響を与えているのかを主に研究されていた。特に日本では日本語の母語話者と留学生を対照に研究が行われ、「日本人の断り方は他の留学生より、曖昧で間接的である²⁾」というステレオ・タイプの結論が主張されている。しかし、権(2007a)は日本人と韓国人の「断り」を比較し、常に日本人の方が間接的な「断り」をとるという既存のステレオ・タイプを否定している。新聞販売員の初対面の人に対して、日本人の方が韓国人より一層「断り」の意向をアカラサマに表していることが分かった。ここでは、長い間日本人固有のステレオ・タイプになった「日本人は間接的な言い方を好む」を否定する立場から研究する。

「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現(権)

本研究では、日本人の大学生と高校生を対象にし、「ものの買出し」の要求に対する「断り」を調査する。断る側の年齢層による「断り」の研究は、筆者の知る限り、権(2006a、2007b)のみである。「断り」の分析方法には Beebe et al.(1990)の「意味公式³⁾」が多くの先行研究で使用されてきた。しかし、「意味公式」は「断り」の言語形式の分析には適するものの、発話行為の言語表現の分析には適さなかった。そのために「断り」の分析には最近ポライトネスを用いて分析する研究者が増えている。本研究でも「意味公式」と「ポライトネス」の両方から考察する。

2. 調査

調査期間：大学生 - 2004 年 10 月、高校生 - 2006 年 7 月～8 月

調査対象者：満 19～21 才の新潟大学生 - 50 人

満 17～18 才の新潟市北越高等学校生と三条商業高等学校生 - 50 人

場面の設定：三宅の分類法(ウチ、ウチ、ヨソ、ソト)⁴⁾に従ったが、今回はウチとウチに絞って「親しみ」が絡まる両グループにおける「断り」表現を分析するために次のように設定をした。

表1 ウチとウチの構成表

場面	親疎関係	内容
場面1	ウチ	家族の関係 兄弟関係
場面2	ウチ	家族以外でごく親しい関係 例) クラブやサークル関係

調査方法：これまでの「断り」研究には主に2つの調査方法が使われている。1つは談話完成テスト(Discourse Completion Test：以下DCTに略)であり、与えられた質問に答えを書き込むものである。これは短期間のうちに大量のデータが得られるという長所がある反面、書き込む方式のために答えは書き言葉になりがちである。2つ目はロールプレー(role play)である。DCTの代わりに最近多くの研究者から使われている方法であり、働きかける人とインフォーマント(調査対象者)の会話を分析するものである。そのため、DCTより自然な会話分析が可能であるがたくさんのデータを集めるには限度がある。従って、今回は両調査の長所を考慮し、ロールプレーとDCTを組み合わせた以下のような談話ロールを用いて調査を行った。

表 2 談話ロールの構成表

<p>談話完成テスト (<u>Discourse</u> completion test) (多数の資料を集められる・答えが短く、資料の処理が簡単)</p> <p style="text-align: center;">+</p> <p>ロールプレー (<u>Role</u> play) (談話完成テストより自然な会話を取ることができる、 turn-taking・同じ情報の繰り返し・同じ意味公式の繰り返しが現れる)</p> <p>談話<u>ロール</u> (<u>Discourse</u> <u>Role</u> test)</p>
--

調査内容：年上の人からの「ものの買出し」に対する年下の人「断り」である。

表 3 場面の台詞 (依頼内容)

場面 1	<p>あなたは相手の兄・姉役です。あなたは弟・妹さんに店に行って菓子と飲み物を買ってくるように要求します。台詞のとおり要求してください。</p> <p>貴方：(相手に対して) お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。 俺 / (私) 今レポートで忙しいから無理なんだけど。</p>
場面 2	<p>あなたは相手の親しい先輩役です。あなたは後輩さんに店に行って菓子と飲み物を買ってくるように要求します。台詞のとおり要求してください。</p> <p>貴方：(相手に対して) お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。 お金渡すから。</p>

働きかける人に表 3 で示した台詞を渡し、調査対象者の前で役にふさわしい声のトーンで演技してもらった。そして調査対象者は働きかける人と 1 対 1 で会話をしているように雰囲気をつくり、練習を通してなるべく話し言葉で答えるようお願いした。以下は調査対象者に渡した「談話ロール紙」である。

「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現（権）

表 4 談話ロール紙

場面1に対する談話ロール紙	あなたは弟・妹役です。自分の兄・姉から何かを要求されます。でも、あなたはその要求が気に入りません。最大限、自分が日常生活で使っている言葉遣いで工夫しながら最後まで断り続けてください。 返事(断り)： _____。
場面2に対する談話ロール紙	あなたは後輩役です。自分の親しい先輩から何かを要求されます。でも、あなたはその要求が気に入りません。最大限、自分が日常生活で使っている言葉遣いで工夫しながら最後まで断り続けてください。 返事(断り)： _____。

3. 意味公式とポライトネス

3.1 意味公式

調査結果は、Beebe et al. (1990)や熊井(1993)などの「意味公式」の分類を参考の上、若干修正を加えて、以下のように分類した。

表 5 意味公式の分類

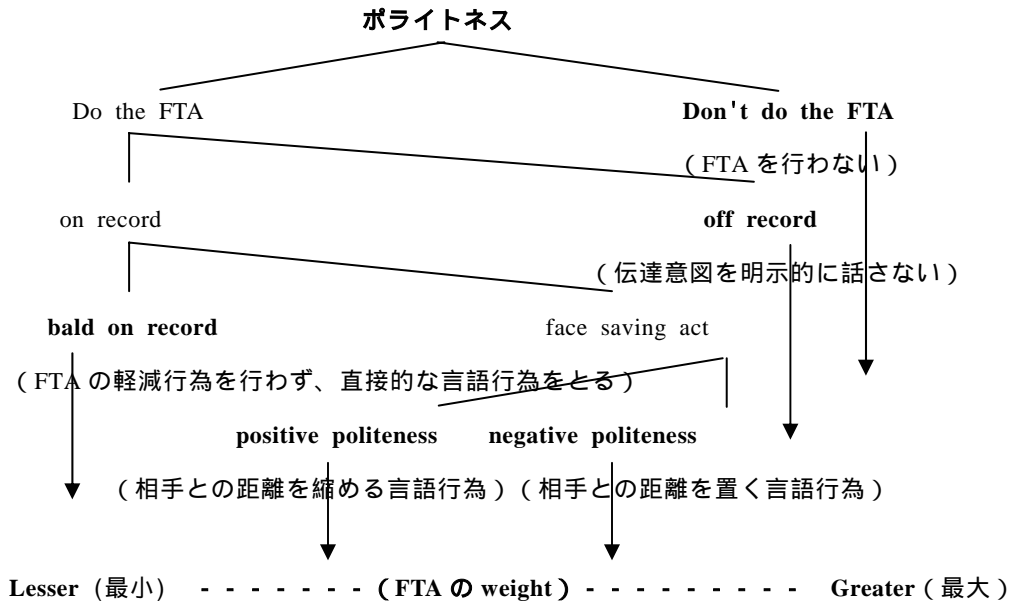
意味公式	意味公式の内容および例
「直接的断り」	単刀直入に断るもの。 例) お断りする。 例) いやだ。
「理由」	断らざるを得ない状況説明。 例) お金がないから。
「謝罪」	断ることに対するお詫び。 例) ごめんね。
「回避」	冗談・繰り返し・ヘッジ・話題転換・沈黙など。 例) ちょっとあれなんだね。
「非難」	相手や要求内容について責める。 例) いやだって言っているでしょ。
「代案提示」	別の解決案を出す。 例) **にあたってください。
「情報要求」	相手に情報を聞くもの。 例) どこに使うの？

「その他」	上記に該当しないもので、約束や共感の気持ちなど。 例) また今度。
-------	--------------------------------------

3.2 ポライトネス

Brown and Levinson(1978 : 以下 B&L)は、Goffman(1976)のフェイス⁵⁾(face)を引用し、人間は positive face(積極的フェイス)⁶⁾と negative face(消極的フェイス)⁷⁾があり、相手のフェイスや自分のフェイスを傷ついたり、傷つけられたりすることもあると述べている。さらにこのようなフェイスを傷つける可能性が人間のコミュニケーションには潜在的にあると指摘している。コミュニケーションにおいて、相手または自分のフェイスを脅かす行動 (Face-Threatening Acts : FTA)の可能性を無くすために会話の参加者は positive face と negative face を念頭においた **positive politeness**⁸⁾か **negative politeness** を目的に何かのポライトネス・ストラテジー (politeness strategy)を使用しなければならない。ポライトネス・ストラテジーは聞き手と話し手に関わる「社会的距離 (social distance) 」と「支配力 (power) 」、そして「ある行動の負担度 (absolute ranking of imposition) 」によって FTA の見積もり (weight)が決まり、FTA の見積もりが大きくなればなるほど、「FTA を行わない」>「off record」>「negative politeness」>「positive politeness」>「bald on record」の順にストラテジーを使うことになる。

図1 ポライトネス・ストラテジー



「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現(権)

B&L のポライトネスは言語学に大きな影響を与え、広く語られる反面、多くの批判もなされている。ここではフェイスについて触れたい。B&L はフェイスの説明において、ある行動が話し手または聞き手のどちらかのフェイスにとって脅かされると述べている。しかし、Thomas(1995)、宇佐美(2002)などの研究者は、多くの発話行為は話し手にとっても聞き手にとっても同時にフェイスを脅かす余地があると指摘しており、フェイスの再考察が必要であることを示唆している。さらに、話し手にとってフェイスを考える際 negative face か positive face のどちらか1つのみが働く場合もある反面、両方が働く場合もあると指摘したい。次の例を見よう。

例1) 妹からのお金の要求 - 姉の「断り」

1 回目の要求：お姉ちゃん！ 今月お金やばいから 1 万円貸してくれない？

調査対象者：え～、いやだよ。 (「直接的断り」)

2 回目の要求：来月すぐ返すから、お願い！貸して！

調査対象者：あたしもほしいものがあったさ。ちょっと無理！ (「理由」+「直接的断り」)

例1の「断り」のように、日本人の調査対象者は1回目の要求に対する1回目の「断り」において **bald on record** にあたる「直接的断り」で「断り」を行っている。調査対象者(姉)は依頼者(妹)との「社会的距離」を軽く感じ、姉という「支配力」によって1万円の大金を守ろうとする自分の negative face に働き掛けている。しかし、「直接的断り」を受け入れず、再び要求してくることによって、姉は「理由」+「直接的断り」を用いて相手に「断り」を分かってもらおうと言いながら、1回目と同様にあからさまに断っている。前者の「理由」は自分もほしいものによって依頼者と同様、お金が要ることをアピールしながら、相手の思い込みである「家族だから、1万円の大金が要求できる」、すなわち相手の好意を求めることができる positive face に働きかけるものである。後者は直接に相手の意図に従えないことを表すことによって、お金を守ろうとする negative face に働きかけるものである。よって、例1の姉は2回目の「断り」において、positive face と negative face を同時に組み合わせたフェイス相互作用によって「断り」を遂行していると言えよう。フェイス相互作用とは 発話行為の中から現れるフェイスの組み合わせである。今回フェイス相互作用について以下のように分類する。

表6 フェイス分類

フェイス	定義	下位分類
selfish-face or speaker's face	発話の中で、話し手のフェイスのみを考慮した場合。	positive face : 相手から認められたい・好かれたい・よく見られたいという気持ち
		negative face : 相手から邪魔されたくない・自分の自由や領域を脅かされたくないという気持ち
		semi face : positive face + negative face
mutual face	発話の中で、相手のフェイスを考慮しながら話し手自分のフェイスも考慮した場合。	聞き手と話し手の positive face を同時に考慮する。
		聞き手の positive face + 話し手の negative face
		話し手の positive face + 聞き手の negative face
		聞き手と話し手の negative face を同時に考慮する。
hearer's face	発話の中で、話し手のフェイスを押さえて相手のフェイスを主に考慮した場合。	positive face
		negative face
		semi face

「断り」を表す「直接的断り」の negative face(表に出る場合もあるし、出ない場合もある)と「直接的断り」の前後に来る諸ファクタにあたるさまざまなフェイスとの組み合わせを用いて分析する。

「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現（権）

4. 日本人の大学生と高校生の「断り」表現

談話ルールに基づき、日本人の大学生と高校生の「断り」において、どのようなフェイス相互作用が現れるのかを比較・分析する。

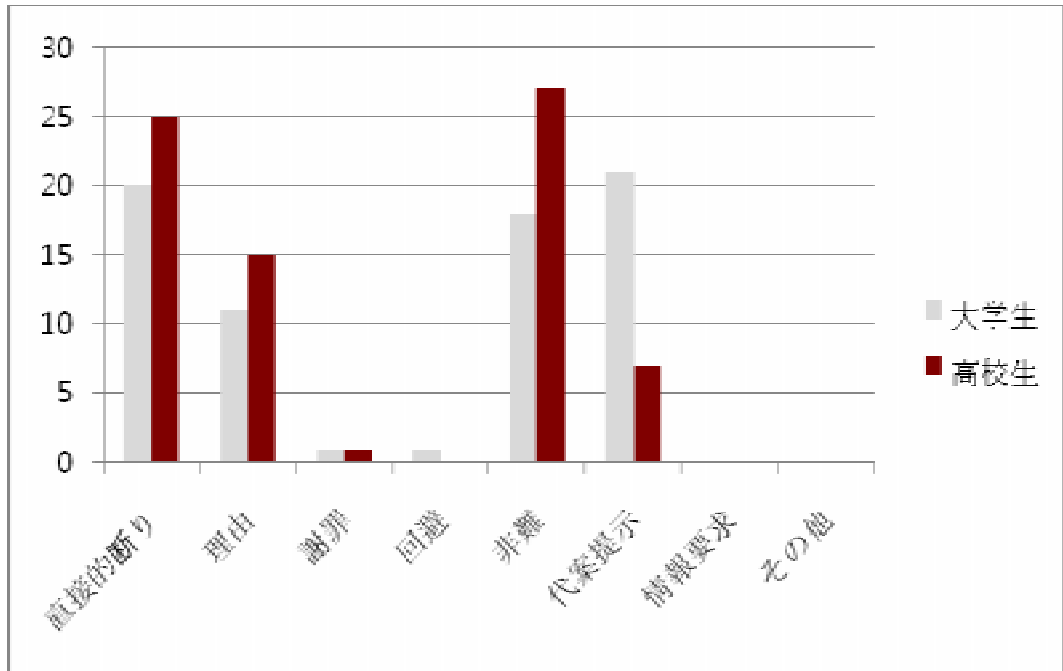
4.1 家族に対する大学生と高校生の「断り」

家族の中で年上の人(兄・姉)から「ものの買出し」をうけた時、日本人の大学生と高校生は次のようなフェイス相互作用によって「断り」を遂行している。表7を見てみよう。

表7 兄・姉からの「物の買出し」に対する日本人のフェイス相互作用

調査対象者	直接的断りのみ ⁹⁾	selfish-face						mutual face				hearer's face	
		positive face		negative face		semi face		相手の positive face +自分の positive face		相手の positive face +自分の negative face		positive face ¹⁰⁾	
		オン ¹¹⁾	オフ ¹²⁾	オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ
フェイス	8 : 9 ¹³⁾	1 : 2	・	9 : 11	26 : 20	・	2 : 1	・	0 : 1	・	0 : 1	2 : 3	2 : 2
理由	・	1 : 2	・	3 : 5	5 : 4	・	2 : 2	・	0 : 1	・	0 : 1	・	・
謝罪	・	・	・	・	・	・	・	・	0 : 1	・	・	1 : 0	・
回避	・	・	・	・	1 : 0	・	・	・	・	・	・	・	・
非難	・	・	・	4 : 6	13 : 26	・	1 : 0	・	・	・	・	・	・
代案提示	・	・	・	4 : 1	14 : 0	・	1 : 0	・	・	・	0 : 1	1 : 3	2 : 2
情報要求	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
その他	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・

意味公式の使用頻度に対するグラフ



兄と姉からの要求に対して、日本人の大学生と高校生は主に **selfish-face** を使用している共通点が見られる。日本人は「相手は弟・妹であり自分は年上だから、相手にお菓子などを買ってくるように頼める」と思い込んできた要求者(兄・姉)の **positive face** を配慮していない。詳しくみると、大学生と高校生は **selfish-face** の **negative face** に多く働きかけている。断る側の「直接的断り」を伴わず(オフ)、**negative face** を守るために、大学生と高校生は違う意味公式によって断っている。すなわち、「断り」の意味を相手に表で伝えないで(オフ)、「断り」の含みを表すために大学生は主に「代案提示」を、高校生は「非難」を多く使用することが分かる。次の例を見よう。

例2) 大学生

兄からの要求：お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。

俺今レポートで忙しいから無理なんだけど。

調査対象者：うん～、家にある菓子食べれば。 (「代案提示」)

調査対象者：忙しいから、お母さんに頼みなよ。 (「理由」+「代案提示」)

調査対象者：え～！、あそこにいるやつは暇だよ。 (「代案提示」)

調査対象者：俺食べたくないし、自分で買ってくれば。 (「理由」+「代案提示」)

「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現(権)

例3) 高校生

兄からの要求: お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。

俺今レポートで忙しいから無理なんだけど。

調査対象者: 知らねえよ。 (「非難」)

調査対象者: お前が食べるもんだろう。俺は関係ねえ。 (「非難」)

調査対象者: なんで俺ばかりやらせるの。 (「非難」)

調査対象者: そんなに忙しいなら、食べなきゃいいじゃん。 (「非難」)

例2、3のように日本人は兄・姉からの「ものの買出し」に対して、「断り」の意味をあからさまに表す「直接的断り」を使用せず、自分の negative face に働きかけることによって「断り」を遂行している。例2において大学生は自分の negative face に働きかけるために「代案提示」を多く使用している。「代案提示」は相手のために誠心誠意に解決案を考えあう場合もあるが、今回の「代案提示」は自分のやりたくない気持ちを表すために第3の物事に責任を転嫁する働きをしている。そのために要求者(兄)は弟と妹が要求に応じたくないことを認識できるであろう。反面、高校生は大学生と同様、兄・姉に対して「直接的断り」を使用せず、自分の negative face に働きかけるものの、使用している意味公式には多くの違いが見られる。例3から分かるように、高校生はすべて「非難」を使用している。「非難」は実際「断り」の意味は含まれていないが、相手や要求のことを責めることによって自分の negative face を守ることができると思う。高校生は意図的に「直接的断り」という negative face に働きかけないで、「非難」を用いて間接的に negative face に働きかけたと考えられる。ちなみに「非難」は大学生も多く使用したものであるが、大学生の「非難」には例3の“知らねえ”、“関係ねえ”のような述語の語尾を縮約したものが見られなく、大学生と高校生の「非難」の表し方の違いも覗かれた。

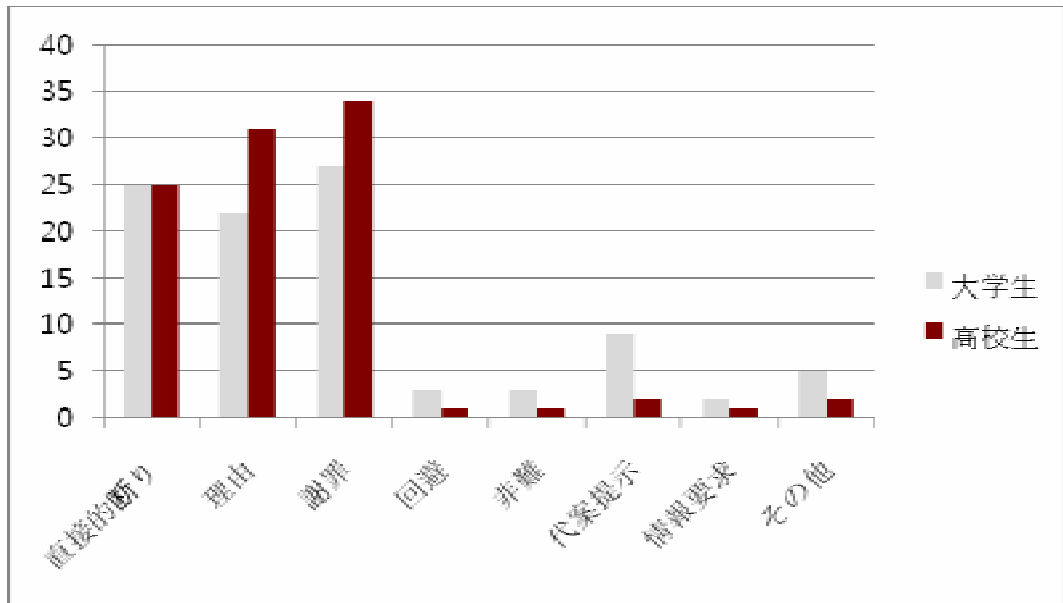
4.2 親しいグループに対する大学生と高校生の「断り」

親しい年上の人(先輩)から「ものの買出し」をうけた時、日本人の大学生と高校生は次のようなフェイス相互作用によって「断り」を遂行している。表8を見てみよう。

表8 親しい先輩からの「物の買出し」のフェイス相互作用

調査対象者	直接的断りのみ	selfish-face						mutual face				hearer's face	
		positive face		negative face		semi face		相手の positive face + 自分の positive face		相手の positive face + 自分の negative face		positive face	
		オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ	オン	オフ
フェイス	7:8	0:3	0:2	2:2	6:3	・	2:0	4:8	10:16	3:0	4:0	9:4	2:2
理由	・	0:3	0:1	0:2	2:2	・	2:0	4:8	10:17	3:0	1:0	・	・
謝罪	・	・	・	・	・	・	・	4:9	11:20	3:0	3:0	5:4	1:1
回避	・	・	0:1	・	0:1	・	・	・	・	・	2:0	・	1:0
非難	・	・	・	0:1	3:2	・	・	・	・	・	・	・	・
代案提示	・	・	・	2:0	4:0	・	2:0	・	0:2	・	1:0	・	・
情報要求	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1:0	1:0	0:1
その他	・	・	・	・	・	・	・	・	1:0	2:0	・	4:0	・

意味公式の使用頻度に対するグラフ



「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現(権)

日本人の大学生と高校生は、家族(兄・姉)に対して **selfish-face** に働きかけて断っている反面、親しい先輩に対しては **mutual face** に変更して相手のフェイスまで考慮する傾向が現れる。しかし、大学生と高校生は「兄・姉」と「親しい先輩」に対して「直接的断り」を伴いながら(オン)、フェイス相互作用を使う方が「直接的断り」を伴わず(オフ)、フェイス相互作用を行う使用頻度より低いし、大学生と高校生のフェイス相互作用の使用傾向(家族に対しては **selfish-face**、親しい先輩に対しては **mutual face**) が似ている共通点も見られる。

親しい先輩からの要求に対する「断り」を詳しくみると、大学生と高校生はお互いに **mutual face** の「相手の positive face + 自分の positive face」を多く使用している。しかし、高校生の場合は大学生が使用した「相手の positive face + 自分の negative face」に働きかけていない違いが見られる。次の例を見よう。

例 4) 大学生(**mutual face** の「相手の positive face + 自分の positive face」)

先輩からの要求：お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。お金渡すから。

調査対象者：すみません。これから授業なので、ごめんなさい。

(「謝罪」+「理由」+「謝罪」)

調査対象者：あのう～ほんとうに行きたいんですが、バイトに行かないといけないので、すみません。

(「その他」+「理由」+「謝罪」)

例 5) 高校生(**mutual face** の「相手の positive face + 自分の positive face」)

先輩からの要求：お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。お金渡すから。

調査対象者：私先生に呼ばれまして、すみません。

(「理由」+「謝罪」)

調査対象者：先輩、バス時間がありませんので、ごめんなさい。

また今度いきますのでお願いします。 (「理由」+「謝罪」+「その他」)

調査対象者：先輩が何が好きか分からないし、選ぶの下手なので、申し訳ありません。

(「理由」+「理由」+「謝罪」)

例 6) 大学生(**mutual face** の「相手の positive face + 自分の negative face」)

先輩からの要求：お菓子と飲み物 適当に買って来てくれない。お金渡すから。

調査対象者：行けないです、本当にごめんなさい。

(「直接的断り」+「謝罪」)

調査対象者：今忙しいから無理です。すみません。 (「理由」+「直接的断り」+「謝罪」)

上記の例 4、5 のように、大学生と高校生は「相手は年下であり親しい後輩だから、お菓子などを買ってくるように頼める」という positive face に働きかけてくる親しい先輩に対して、先輩の positive face を立てながら、断らなければならない自分の「断り」の正当化を先輩から分

かってもらおうとして、断った後の人間関係も考慮して「断り」を遂行している。大学生と高校生は相手の positive face に働きかけるために両グループは「謝罪」を用いている。「謝罪」以外には「その他(約束)」や「情報要求」によっても相手のフェイスを立てている。しかし、例6の「断り」のように、大学生は先輩の positive face を立てながらも、自分の negative face(先輩の「要求」に応じず、自由にいたい)に働きかける「断り」も表している。この現象は高校生との違いであり、高校生も自分の negative face に働きかける場合があるものの、相手のフェイスと同時に働きかけない特徴が言えよう。

4. まとめ

日本人の大学生と高校生の「断り」を意味公式とポライトネスのフェイス相互作用によって考察した。その結果をまとめると以下ようになる。

家族(兄・姉)からの要求(場面1)に対して、大学生と高校生は主に「直接的断り」を伴わず(オフ)、selfish-face の negative face に働きかける共通点が現れる。しかし、negative face のために大学生は「代案提示」を、高校生は「非難」を多く用いる。

親しい先輩からの要求(場面2)に対して、大学生と高校生は「直接的断り」を伴わず(オフ)、mutual face に働きかける共通点があり、家族(兄・姉)に対する「断り」と違う特徴が現れる。

と関連付けて、親しい先輩に対して大学生と高校生は mutual face の相手の positive face + 自分の positive face を多く使用するし、大学生と高校生は「謝罪」を伴って相手の positive を立てる共通点が現れる。しかし、大学生は mutual face の「相手の positive face + 自分の negative face」 も使用することによって、自分の negative face を守ろうとする大学生の方が高校生より相手に「断り」を強く表そうとする傾向が分かる。

以上、日本人の大学生と高校生の「断り」を比較してきた。家族(兄・姉)と親しい先輩に対して、両グループは「断り」の意味を表に表す「直接的断り」を用いず、「代案提示」、「非難」、「謝罪」などによって、相手に間接的に「断り」を伝えている。しかし、大学生の方が「直接的断り」である自分の negative face と似た negative face を多く使用し、高校生より直接的な「断り」を多く使用することが見られる。

年齢層の差による「断り」におけるフェイス相互作用の違いが見られたことから、今後対象を広げ、日本人のコミュニケーションのステレオ・タイプである「間接的な言い方を好む」と

「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現(権)

いう特徴づけが成立するかどうかを「断り」研究によって検証していきたい。

<注>

- 1) Searle(1969)、発話行為とは人間におけるコミュニケーションの最小単位であり、言葉を話すこと、陳述、命令、質問、約束、依頼などの発話行為を遂行することに一致すると述べている。
- 2) 角谷(1996)を参照。
- 3) 意味公式とは、より細かく分類した「断り」のストラテジーの種類と考えてよい。
- 4) 三宅(1994)p.31、「ウチ：家族やごく親しい人々」「ソト：親しくないが自己やウチと関連がある人々」「ヨソ：自己やウチと関係がない人々」
- 5) B&Lが定義した「フェイス(face)」の概念は、各文化における「面目」、「面子」、「顔」などの固有の概念として誤用されているので、ここでは「フェイス」と記す。しかし、「フェイス」の下位分類は **positive face** と **negative face** と記す。
- 6) 相手から好かれない・認められたいといった気持ちである。詳しくは表6を参照されたい。
- 7) 相手から自分の領域や自由を脅かされたくないといった気持ちである。詳しくは表6を参照されたい。
- 8) フェイスに働きかけるポライトネスに関する表記は英文で記す。
- 9) 「断り」の意味を表に表す表現のみで「断り」発話行為を遂行する場合である。
例) いやだよ。
例) いきたくないよ。
- 10) 今回 **hearer's face** の **negative face** や **semi face** は現れなかった。
- 11) オン:「断り」の意味を言葉で表す「直接的断り」が伴われることを示す。
例)

selfish-face	
positive face	
オン	.
40回 7%	.

解釈:「直接的断り」+ **selfish-face** の **positive face** の組み合わせが40回使用される。

例) 無理。私も今いそがしいからね。(「直接的断り」+「**selfish-face** の **positive face**」)

- 12) オフ:「断り」の意味を言葉で表す「直接的断り」がない上で、行われるフェイス作用。
例)

selfish-face	
positive face	
	オフ
	20回 3%

解釈:「直接的断り」が現れず、**selfish-face** の **positive face** のみで20回使用される。

例) 私も今いそがしいからね。(「**selfish-face** の **positive face**」)

- 13) 数字の表記において左側:大学生、右側:高校生のデータを表す。例)8:9の場合、大学生のデータが8、高校生のデータが9である。

<参考文献>

宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開」『言語』Vol.31、No.1~Vol.31、No.13 大修館書店

生駒知子・志村明彦(1992)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー:「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号 pp.41-51

角谷智子(1996)「異文化間理解における日本人-日本人のコミュニケーションパターン」『日本語・日本

文化』第22号 大阪外語大学留学生日本語教育センター

熊井浩子(1993)「外国人の待遇行動の分析(2) - 断り行為を中心にして - 」『静岡大学教養部研究報告』
第28巻 第2号 pp. 1 - 37

権英秀(2006a)「断りから見た日・韓両言語の比較研究」新潟大学修士論文

——(2006b)「日本人の大学生と高校生の言語表現について - お金の要求に対する「断り」表現の相違
点 - 」第37号 新潟大学現代社会文化

——(2007a)「日・韓両言語の初出マーカ―」『日本学報』第70号 韓国日本学会

——(2007b)「日本人の大学生と高校生の『断り』表現 - 年齢層の差によるポライトネスを中心に - 」
『日本語文学』第34集 大韓日語日文学会

任炫樹(2003)「日韓両言語における断りのストラテジー - 言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心
に - 」『ことば』24 現代日本語研究会 pp.60-77

藤森弘子(1996)「関係修復の観点からみた『断り』の意味内容 日本語母語話者と
中国人日本語学習者の比較」『大阪大学言語文化学』Vol.5 pp.5 - 15

三宅和子(1994)「日本人の言語行動パターン - ウチ・ソト・ヨソ意識 - 」『筑波大学
留学生センター 日本語教育論集』第9号 筑波大学 pp.29 - 39

山梨正明(1992)『発話行為』大修館書店

Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990) “ Pragmatic Transfer in Refusal s. ”
In R.C.Scarella, E.Anderson & S.C.Krashen eds.), *Developing Communicative
Competence in a Second Language*. NewYork : pp.55-73, Newbury House Publishers.

Brown, P. & S. C. Levinson(1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage*.
Cambridge : Cambridge University Press.

Goffman, E. (1976) “ Replies and Responses. ” *Language in Society*. Vol.5 pp.257-313,
Cambridge University Press.

Hinds, J. (1982) *Ellipsis in Japanese*. Carbondale, IL: Linguistic Research, Inc.

Miriam E. & Bodman. J. (1993) “ Expressing Gratitude in American English ” *English Teaching* 49.
pp.221-225

Tanaka N. (1993) *The pragmatics of uncertainty: its realization and interpretation in
English and Japanese*. Unpublished PhD Thesis, Lancaster University.

Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction : An Introduction to Pragmatics*. London : Longman.

浅羽亮一監修、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳 (1998)
『語用論入門 - 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社

主指導教員(大石強教授) 副指導教員(船城俊太郎教授・佐々木充教授)